

初代薬局長・院長夫人

柴田 勝子(シバタ カツコ) プロフィール

1915年(大正4年)2月7日

～1981年(昭和56年)9月27日(享年66歳)

【経歴】

帝国女子薬学専門学校(帝国女子薬専)

【現：大阪薬学専門学校】卒業



【薬局長として】

柴田外科医院は19床の有床診療所であったため、薬局長としての薬剤管理・調剤業務に加え、診察の介助、入院患者の献立作成など、多忙を極めた。そのかたわら、4人の子供には、日本の伝統文化を中心とした躰・教育に力を入れ、子育てを行うという万能ぶりを発揮した。

激動の時代、激務を完遂するための苦労が大変なものであったことは、想像に難くない。

【文化人として】

茶道(表千家)、華道(草月流)、日本舞踊(花柳流)、三味線、琴、俳句、俳画(赤松柳史門下)、などの日本の伝統芸術を愛し、素人ながら審美眼には光るものがあった。

また、漆器・茶器、掛け軸、美術品などの手入れはことさら丁寧で、その取り扱いには、定評があった。

また、文化人としての活動ばかりでなく、学生時代は山岳部に属し、紀泉アルプスへの登頂、六甲から宝塚までの遊歩などを好み、晩年は、熊野三山から那智の滝を巡るなど、活発な面もあった。

【句集・八雲について】

柴田勝子は、昭和43年頃から本格的に句作を始め、『砂丘山口支部』と『山口市医師会榎野句会』の同人として、四季の折々にふれては投稿し、雅号は当初『翠彰』を頂いていたが、昭和54年より、『八雲』に改めた。

『や雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を』と須佐男命(スサノオノミコト)が櫛名田比売(クシナダヒメ)を迎えて詠まれた古事記の中の一節から『八雲』としたという。

神話のふる里、出雲への憧憬は強く、出雲大社はもちろんのこと、その裏手にある八雲山や八雲の滝などの『八雲たつ出雲風土記の丘』を訪ね、八束郡にある神魂(カモス)神社や熊野大社へも参拝した。生涯の雅号となった『八雲』へ深い思い入れがあったことが伺える。

